

第3節 古市古墳群の埴輪生産体制－墓山古墳周辺の方墳出土円筒埴輪の検討から－

1 はじめに

巨大な前方後円墳をかかえもつ古市古墳群は、古墳時代中期を中心として展開する。各古墳の実態は、内部主体や外部施設の調査成果などを基に、様々なアプローチによって徐々に明らかになりつつある。中でも円筒埴輪は大型墳の外堤部分を中心とした発掘調査によって、最近20年間で最も多く蓄積された資料の一つである。また、この調査成果と軌を一にして川西宏幸の『円筒埴輪総論』[川西 1978] が発表され、それ以降、円筒埴輪を対象とする研究が盛んに試みられている。その結果、円筒埴輪編年による大型古墳の相対的位置関係は確立され、大幅な修正はない状況に至っている。

しかしながら、川西の言う第Ⅲ期と第Ⅳ期を中心として展開する古市古墳群内での時期区分は、未だ明瞭になったとは言い難い。川西はこの両期を画する要素の一つに焼成方法の相違を挙げるが、一古墳の中での無黒斑と評される埴輪の中に有黒斑を含む例は増加しており、これを指標とするには多少問題がある。現在では、外面二次調整のB種ヨコハケによる細分から編年の見通しが立てられ [一瀬 1988a・1992a]、中・小型古墳の前後関係や大型古墳との併行関係を明らかにしつつある。しかしながら、この種のヨコハケが欠落する埴輪も多く、その場合には他の比較要素を必要とするが、この点についても未だ充分な検討がなされたとは言えない。

さて本稿で問題とする新規発見の西墓山古墳は、隣接する前方後円墳の墓山古墳を主墳とし、その周囲に位置する向墓山古墳、淨元寺山古墳、野中古墳といった方墳とともに従来陪冢と捉えられる範囲に属している。これら5基の出土埴輪には有黒斑、無黒斑があり、前述の時期区分に対して微妙な問題が含まれる。本書では向墓山古墳を除く4基の古墳について、すでに出土埴輪を図示し、各々の観察を報告している。主にB種ヨコハケの細分を基に、各古墳の時期を墓山古墳、西墓山古墳は川西の円筒埴輪編年で第Ⅲ期に、淨元寺山古墳、野中古墳は第Ⅳ期に属することを指摘した。

そこで、これらの古墳出土埴輪の所見を基にB種ヨコハケ以外の要素、つまり全体形態、細部形態の変化といった要素も検討することで、第Ⅲ期から第Ⅳ期の移行過程の在り方を明らかにできると考える。そして、それらを前後する時期の埴輪群にも目を向けることで、大きな枠の中での時間的推移となる分類を呈示することもできよう。加えて、従来の古市古墳群での円筒埴輪編年研究を軸に、西墓山古墳を始めとする4基の古墳出土埴輪とともに、周辺地域の埴輪群も援用しつつ検討する。そして、これらの結果から古市古墳群における段階区分を呈示するとともに、5世紀代における埴輪生産体制について言及する。さらに、その推移を基に、墓山古墳を中心とした陪冢の在り方についても最後に述べる。

2 円筒埴輪各部の移行過程

法量と形態

中期を中心に資料をもつ古市古墳群を軸に、まず全体形態を検討することから始める。円筒埴

輪の資料は蓄積されつつあるものの、全体を窺うことのできる資料は限られる。そのため口縁部径と底部径のまとめから全体を復元する。各古墳出土埴輪の口縁部径と底部径の分布を図に示した（図97）。

この図でまず目を引くのは、口縁部径 80 cm 近くを測る津堂城山古墳例 [大阪府教育委員会 1980] である。底部径 60 cm、器高 130 cm を超える大型の円筒埴輪であり、出土状況から形象埴輪を載せていた可能性がある。本来、円筒埴輪は墳丘や堤上に多量に配列することを目的とし、すべての地点にこの大きな埴輪が求められたわけではない。この例は、特定位置にのみ限定的に用いられたと考えられるため、墳丘や堤上に多量に配列した円筒埴輪と性格を異にする。^{註1} この種の特定位置に配置する大きな埴輪は津堂城山古墳に限らず全期に認められるが、時期的な法量変化の目安にはなりにくい。しかし、多量配列の埴輪に比べ特徴的に大きなことから、法量の違いによって区別することができる。この津堂城山古墳例の突出する例を参考にするならば、表の各

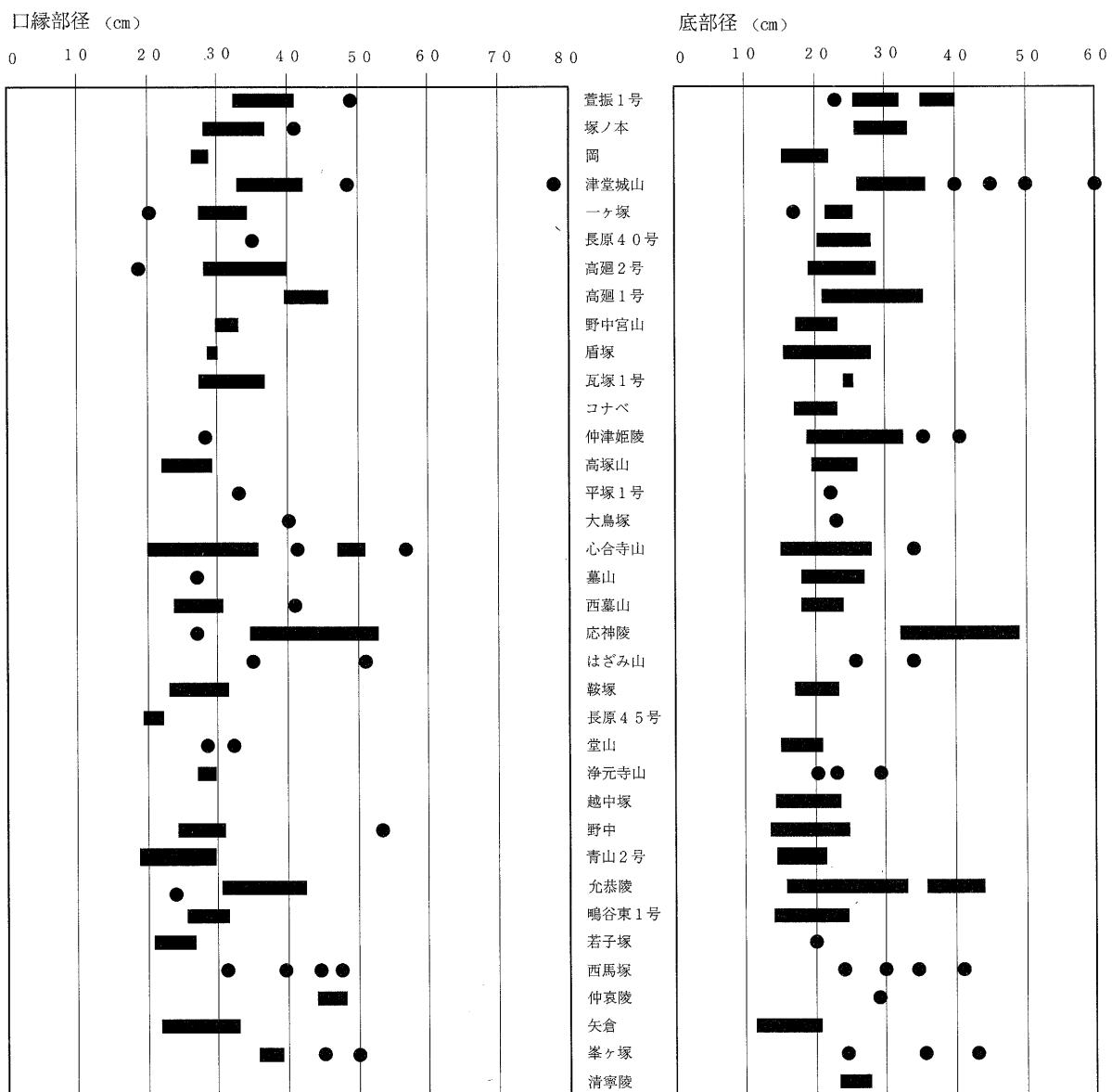


図97 各古墳出土埴輪口縁部径・底部径分布図

分布から口縁部径 50 cm、または底部径 40 cm を基準として、それ以上の大きさをもち、かつ各埴輪群の主体を成さない少量の埴輪が存在する場合には、限定的に用いられた可能性があると判断して差しつかえなかろう。該当する埴輪を有する古墳には萱振 1 号墳^{註3}、仲津姫陵古墳、心合寺山古墳、はざみ山古墳、野中古墳、允恭陵古墳、西馬塚古墳、仲哀陵古墳、峯ヶ塚古墳など第 V 期まで及ぶが、特に大型墳にその樹立が限定されるというわけではない。

さて、時期ごとのまとまった特徴的な様相は、多量配列された埴輪の一般的な傾向から抽出し、ここでは上記した大型で少量配置の可能性のある埴輪を分けて考え、本論では取り扱わない。

墳丘に多量に配列され、なおかつ最も法量が大きい埴輪は第 IV 期の応神陵古墳出土例である。口縁部径は平均 43 cm、底部径は 40 cm を測る。この大きさの埴輪を多量に配列するのは応神陵古墳のみであり、その存在は特異である。^{註4}これを除くと、口縁部径は 20 cm から 40 cm を超える程度、底部径は 10 cm から 30 cm 程度の範囲に全体が収まることが分かる。その範囲の中で、口縁部径と底部径はいずれも徐々に縮小化に向かい、その方向にまとまりがみられる。

口縁部径には、二つのまとまりを見いだすことができる。A と B とに分類して記述する。

A 口縁部径 30 cm から 40 cm に分布の中心があるので、第 II 期の古墳出土例に多く認められる。それ以外では第 IV 期の允恭陵古墳、第 V 期の峯ヶ塚古墳など前方後円墳出土例に認められる。

B 口縁部径 20 cm から 30 cm に分布の中心があるので、主に第 III 期から第 V 期まで認められる。底部径は漸移的で明確ではないが、全体的な傾向としては第 II 期から第 V 期を通して最も集中するのは 20 cm から 30 cm である。時期が下るにつれて、その分布の中心は径の小さなものへと徐々に移行する傾向が認められ、以下の a から d へと推移する。

- a 30 cm 前後を中心とするものはほぼ第 II 期に限られ、それ以降も存在するが主体を成さない。
- b 20 cm から 30 cm の間に分布の中心をもつものは、ほぼ第 III 期に限られる。
- c 20 cm 以下のものが増加するのは第 IV 期からである。
- d 10 cm から 20 cm に分布の中心をもつものは第 V 期である。

ここで口縁部径と底部径から導き出した傾向を突き合わせると、おおまかに時期ごとの全体形態を復元することが可能である。

第 II 期・Aa／口縁部径は 30 cm から 40 cm に分布の中心があり、相対的に大きい。底部径は 30 cm 前後を中心とし、比較的大きく、口縁部径との差が顕著でないことから全体形態は直立を呈する。

第 III 期・Bb／口縁部径、底部径ともに 20 cm から 30 cm と第 II 期より小さくなるものの、その差が顕著でないことから、全体形態は直立を呈する。

第 IV 期・Bc／口縁部径は第 III 期に比べ大きな変化はみられないものの、底部径を縮小する傾向にあり、20 cm 以下のものを含む割合が多い。このため全体形態は、底部から口縁部にかけて直線的に外傾して開くようになる。

第 V 期・Bd／第 IV 期の傾向が一層顕著なものとして現れる。口縁部径は第 IV 期に比べさらに小さくなるが、それ以上に底部径の縮小が著しく、径 15 cm を測るものも認められる。

全体形態は、底部から口縁部にかけて外傾して直線的に開くものと、口縁部がラッパ状に開く形態が認められる。

この変化の中で、第Ⅲ期と第Ⅳ期の古墳出土埴輪に注目し検討したい。西墓山古墳出土埴輪の口縁部径の平均は29.8cm、底部径は21.2cmである。これは第Ⅲ期の奈良県コナベ古墳出土埴輪〔赤塚1980〕の底部径に等しく、また仲津姫陵古墳の陪冢と考えられる高塚山古墳〔一瀬1986〕の底部径22cmに近い。さらに、墓山古墳では資料数は限られるものの、口縁部径27cm、底部径23.2cmといった平均値を求めることができる。これに対して第Ⅳ期の大坂府堂山1号墳〔小浜1994b〕では口縁部径30.4cm、底部径18.2cm、野中古墳でも口縁部径27.4cm、底部径19.8cmを測る。さらに京都府鳴谷東1号墳〔立命館大学文学部1987・1989〕では口縁部径27.7cm、底部径18.9cmといった状況を示し、上記した第Ⅲ期の古墳出土埴輪より底部径を縮小する傾向にあり、全体に径20cm以下の割合が多く認められる。

以上から第Ⅲ期と第Ⅳ期の違いとして、口縁部径の変化以上に底部径を縮小させる点を見いだすことができる。つまり全体形態が前者は直立気味を呈するのに対し、後者は底部から口縁部にかけて外傾して直線的に開くという違いを反映している。具体的には底部径20cmを境として分かれ、その移行過程においては漸移的であったことを示している。西墓山古墳出土埴輪の口縁部径及び底部径から導き出される形態は、第Ⅳ期に移行する直前の形態を顕著に表すと言えるであろう。

口縁部

以上にみた時期ごとの全体形態は口縁部・底部形態の違いとともに変化する。さらにそれらの各部を検討する。

第Ⅱ期から第Ⅴ期までの古墳出土埴輪に多く認められる口縁部形態を6つに大別し（図98）、その出現頻度を3段階に分け表に示した（表11）。

A類 直立気味に立ち上がり、端部付近で大きく外彎するもの（1類）。さらに特徴的に端部で水平方向に折れ曲がるものがあり、これを分ける（2類）。いずれも端部は上方につまむもの、上下に肥厚させるものなどのバリエーションが認められる。

B類 直立気味に立ち上がり、端部近くでゆるやかに「く」の字に曲がり外反するもの。端部は上方につまむもの、丸くおさめるもの、面をもつものなどのバリエーションが認められる。

C類 直立気味に立ち上がり、端部が水平方向に逆「L」字形に僅かに開くもの。

A類		B類	C類	D類	E類		F類
A1類	A2類				E1類	E2類	

図98 口縁部形態分類図

D類 直立気味に立ち上がるもの。

端部は丸くおさめるもの、平坦面をもつもの、凹面をなすものなどのバリエーションが認められる。

E類 外方向に向かって全体に傾きながら開くもの。端部付近で外彎するもの(1類)と、直線的に外反するもの(2類)を分ける。

F類 上端外面に突帯を貼り付けるもの。

表からはA～E類への推移が読み取れる。まず、各類型の出現と消長を検討する。

Aは1類、2類とともに、第Ⅱ期の埴輪にほぼ例外なく採用される口縁部形態と言えるであろう。A2類は第Ⅳ期まで認められるものの、第Ⅲ期以降は主体を成さない。B類は第Ⅲ期を中心として認められる形態であり、

A1類の形態を受け継ぐものと考えられる。C・D類が中心を占めはじめるのは第Ⅲ期である。その後、C類は第Ⅳ期に続くが第Ⅴ期には認められない。一方、D類は第Ⅳ・V期の古墳出土埴輪において主流を占めるようになる。

E1類は第Ⅲ・Ⅳ期に、E2類は第Ⅳ・V期において主流となる。F類は大型の埴輪に認められる受け口状の口縁部形態であることから、第Ⅱ～V期まで存在する。

時期ごとに特徴的な類型をまとめると以下のようになる。

第Ⅱ期／	A1類	A2類	—	—	—	—	—	—	F類
第Ⅲ期／	—	A2類	B類	C類	D類	E1類	—	—	F類
第Ⅳ期／	—	(A2類)	(B類)	C類	D類	E1類	E2類	—	F類
第Ⅴ期／	—	—	—	—	D類	—	E2類	—	F類

第Ⅱ期の古墳出土埴輪は、ほぼA類で占められる。この期に属する埴輪の口縁部径が大きい理由の一つに、A類の口縁部形状を採用することが挙げられる。一方、第Ⅴ期ではD類とE2類を主体とする。特徴的なE2類が加わるため、全体形態は外傾して直線的に開くものが多い。

この中にあって、最も口縁部形態がバリエーションをもって展開するのは第Ⅲ期であり、第Ⅳ期にはA・B類系の古い要素がほぼなくなり、後半期の新しいものに絞られる。

表11 口縁部各類型の出現頻度

		A 1	A 2	B	C	D	E 1	E 2	F
第Ⅱ期	萱振1号								
	塚ノ本								
	岡								
	津堂城山								
	一ヶ塚								
第Ⅲ期	長原40号								
	高廻2号								
	高廻1号								
	野中宮山								
	盾塚								
第Ⅳ期	仲津姫陵								
	高塚山								
	大鳥塚								
	心合寺山								
	墓山								
第Ⅴ期	西墓山								
	応神陵								
	鞍塚								
	長原45号								
	堂山1号								
第Ⅵ期	淨元寺山								
	野中								
	允恭陵								
	鳴谷東1号								
	白鳥陵								
第Ⅶ期	若子塚								
	西馬塚								
	仲哀陵								
	矢倉								
	峯ヶ塚								
第Ⅷ期	清寧陵								

■ 50%以上 ■ 50%未満 ■ 25%以上 ■ 25%未満

50%以上

50%未満

25%以上

25%未満

25%以上

第Ⅲ期前半では少量ながらもA2類が認められ、後半ではこの期に特徴的なB類とともに、直立気味に立ち上がるC・D類が加わりバリエーションを増している。第Ⅲ期の全体形態が直立気味を呈する理由に、B・C・D類の口縁部形態を主体とすることが挙げられる。墓山古墳出土例ではB・C・D類が認められ、西墓山古墳出土例では、それに加えてE1類が認められる。

第Ⅳ期ではB類がほとんど姿を消し、第Ⅲ期後半に登場するC・D類が目立つようになる。それとともに、直線的に外反するE2類が加わる。E2類は第Ⅳ期以降、第Ⅴ期にわたって主体を成し、第Ⅲ期には認められない特徴的な形態と言える。第Ⅳ期の堂山1号墳出土例ではC・D・E1類とともにE2類が認められ、野中古墳出土例でもC・D類とともにE2類を主体としている。淨元寺山古墳出土例ではC・D類は認められるがE2類を欠くことから、野中古墳よりは古い様相がみられる。

以上に認められる口縁部形態の推移は、各時期における全体形態の違いとなって現れる。つまり、第Ⅲ期の埴輪が第Ⅱ期より口縁部径を縮小させる傾向は、直立気味に立ち上がるB類の口縁部形態を採用する点にある。また第Ⅳ期の全体形態が直線的に開く傾向は、E2類の口縁部外傾化に伴う結果と考えられる。これらの移行過程においては漸移的で、西墓山古墳の口縁部形態の構成は第Ⅲ～Ⅳ期の移行期をよく表している。

底部

底部の形態についても6つに大別し(図99)、その出現頻度を3段階に分け表に示した(表12)。

a類 輪台に相当する部分がやや外側にふんばり、そこから垂直方向に向かうため、断面がゆるやかな「く」の字形になるもの。

b類 輪台に相当する部分が内彎し、そこからゆるやかに立ち上がり、明瞭な屈曲をもたないもの。第1タガから上部は垂直方向に伸びる。

c類 輪台に相当する部分は外傾するが、第1タガから上部は垂直方向に伸びるもの。

d類 輪台に相当する部分が外傾し、第1タガから上部も連続して外方に向かって開くもの。

e類 輪台に相当する部分は直立するが、第1タガから上部は外方に向かって開くもの。

f類 輪台に相当する部分が直立し、第1タガから上部も連続して垂直方向に伸びるもの。

底部形態は口縁部の形態で検討したような、時間的な推移は明確ではない。出現頻度の違いはあるものの、a・b・f類は第Ⅱ～Ⅴ期まで認められ、時期的な差を見いだすことができるのは、

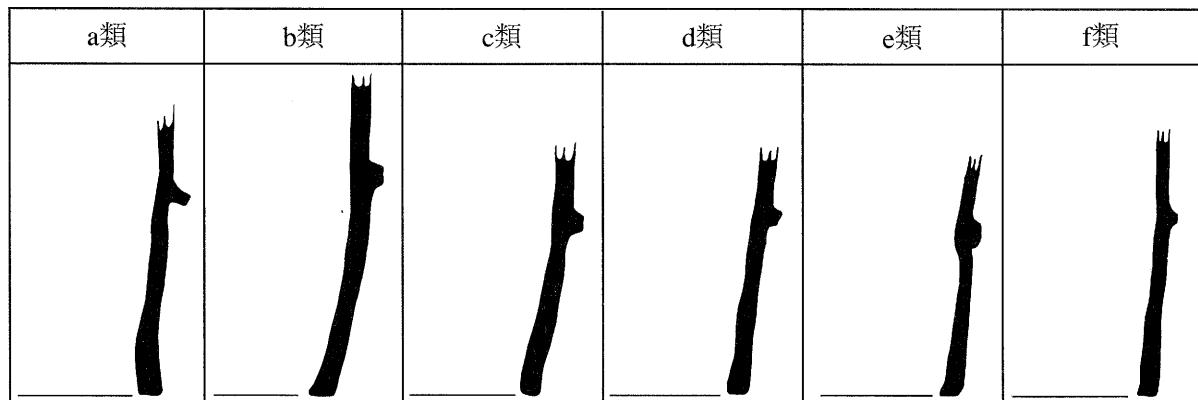


図99 底部形態分類図

c・d・e類に限られる。

出現頻度から時期ごとに特徴的な類型をまとめると以下のようになる。

第Ⅱ期／	a類	b類	—	—	—	(f類)
第Ⅲ期／	a類	b類	c類	—	—	(f類)
第Ⅳ期／	(a類)	b類	c類	d類	e類	f類
第Ⅴ期／	(a類)	(b類)	—	d類	e類	f類

第Ⅱ期に集中するa類は第Ⅴ期まで認められるものの、第Ⅳ期以降は主体的ではない。この、a類とともに多く認められるf類は直立形態という普遍的な形態である。円筒埴輪は常にこの円筒の形態を目指していると考えられるため各

時期にわたって継続して認められる。その出現頻度は埴輪生産においてシステムティックな体制が成立する第Ⅳ期以降に集中するが、これに反し a類は減少する。b類は第Ⅲ期に集中して認められるものの、時期的な傾向を絞り込んで読み取ることは難しい。

第Ⅲ期に認められるc類は、第Ⅳ期に続くが第Ⅴ期にはみられない。墓山古墳出土例にはc類とともにa・f類が認められる。西墓山古墳出土例ではb類が加わる。

第Ⅳ期になって認められるものにd・e類がある。これらは底部形態に違いはあるものの、第1タガから上は外方に向かって開く形態をとる点で共通する。ともに底部径を相対的に縮小させる方向に伴う形態である。野中古墳出土例はa・b・d・e・f類があり、中でもこの期に特徴的なd類を主体としている。

第Ⅲ期と第Ⅳ期の底部形態での大きな変化は、第Ⅳ期にd・e類が出現することにある。それは第Ⅳ期以降、小型の埴輪への移行に伴う形態の変化もある。

タガ間隔

体部の形状としては主にタガ間隔に注目した。第Ⅱ期から第Ⅴ期における、各古墳出土埴輪の体部径とタガ間隔を平均値で示した(図100)。ここでは体部でのタガ間隔のみとし、口縁部高と底部高は含めていない。^{註5}

さて、この図からは一部の例を除き体部径の差の如何を問わず、第Ⅳ期の古墳出土埴輪は第Ⅱ・Ⅲ期に比べ、タガ間隔が狭いことが確認できる。第Ⅴ期では、その傾向は一段と顕著なもの

表12 底部各類型の出現頻度

	a	b	c	d	e	f
第Ⅱ期	萱振1号	■				■
	塚ノ本					
	岡					■
	津堂城山	■				
	一ヶ塚	■	■			
	長原40号					■
第Ⅲ期	高廻2号	■				■
	高廻1号					■
	野中宮山		■			
	盾塚	■	■			
	コナベ		■			
	仲津姫陵	■	■			
	高塚山		■			
	大鳥塚					■
	心合寺山	■	■			
	墓山		■			■
第Ⅳ期	西墓山	■	■			
	応神陵	■	■			■
	鞍塚	■	■		■	■
	堂山1号				■	■
	淨元寺山					■
	越中塚	■	■			
	野中			■	■	
	允恭陵					■
	鳴谷東1号	■	■			■
	白鳥陵					■
第Ⅴ期	若子塚					
	西馬塚					
	矢倉	■	■			
	峯ヶ塚	■	■			
	清寧陵		■			■

■ 50%以上 ■ 50%未満 ■ 25%以上 ■ 25%未満

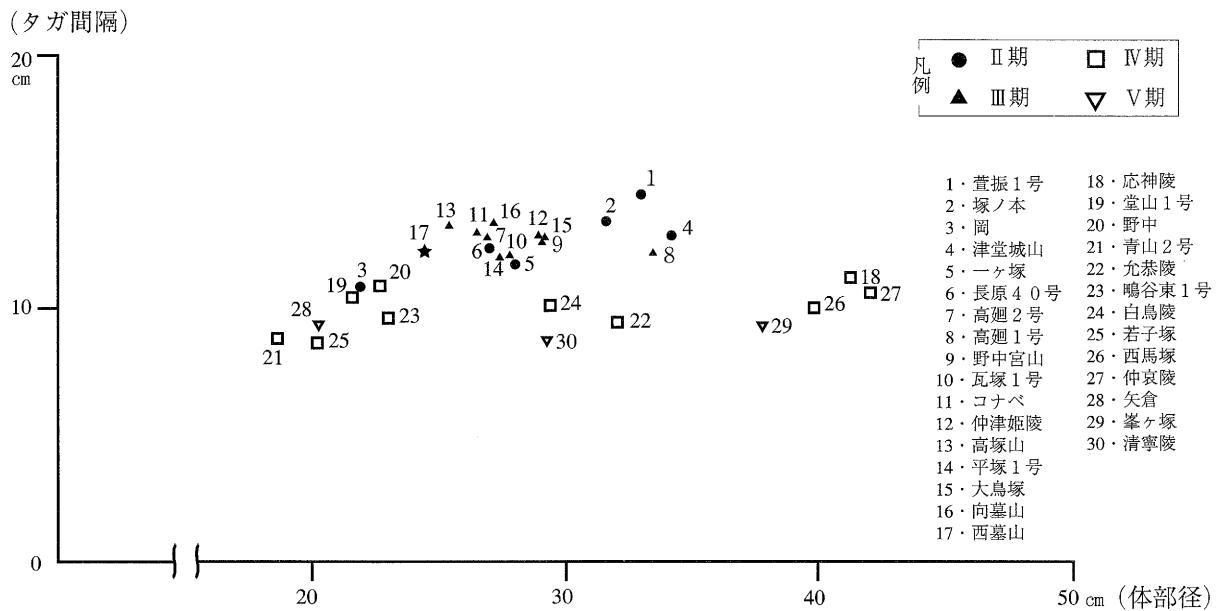


図 100 体部径とタガ間隔の比較図

となる。詳しくみると第Ⅱ期の古墳出土埴輪のタガ間隔はおおむね12~14cmにあり、第Ⅲ期では12~13cmの範囲に収まる。さらに第Ⅳ期では11cm以下に、第Ⅴ期では10cm以下にまとまる傾向を読み取ることができる。すなわち、タガ間隔は時期を追って幅狭くなることが確認でき、古い時期にタガ間隔の広いものが多いという点は、初期にある特殊器台形埴輪の存在を思い浮かべればよいだろう。

こういった推移は外面調整と密接に関係しているため、各古墳出土埴輪の外面調整と合わせ検討を加えることとする。

第Ⅱ期の津堂城山古墳出土埴輪のタガ間隔は13cmを測り、外面調整はタテハケ、A種ヨコハケを主体とする。同じく第Ⅱ期の大坂府萱振1号墳ではナデ、タテハケ調整を主体とし14.5cmを測り、塚ノ本古墳でも13.4cmを測る。第Ⅲ期では仲津姫陵古墳が12.9cmを測り、外面調整ではBa種ヨコハケが目立つとともに、Bb種、断続ヨコハケが観察できる。向墓山古墳〔高野・伊藤1990〕ではタガ間を残すものは少ないが13.4cmを測り、断続ヨコハケとBa種ヨコハケが確認できる。墓山古墳はタガ間を残すものがなく詳細は不明ではあるが、もっとも残りのよい個体から13cm程度であったと推定できる。外面調整はナデの他にBaまたはBb種ヨコハケがある。西墓山古墳では12.2cm、Bb種ヨコハケである。第Ⅳ期の応神陵古墳出土埴輪はBaからBc種を含むが、タガ間隔は11cm前後でまとまり、第Ⅲ期に比べて幅狭いことが分かる。同じく第Ⅳ期でも、Bc・Bd種ヨコハケを主体とする允恭陵古墳では9.4cmと応神陵古墳例よりもさらに幅狭くなっている。第Ⅴ期ではタテハケを中心とし、清寧陵古墳に至っては8.7cmとなる。

この推移を時期ごとにまとめると以下のようになる（図101）。

第Ⅱ期 タガ間隔は12~14cmと総じて広い。それは外面の二次調整がタテハケ、ナデ、A種ヨコハケを主体とするため、厳密には外面調整に対してタガ間隔を意識しない時期と言える。^{註6}

第Ⅲ期 タガ間隔は12~13cmの範囲に収まる。B種ヨコハケが採用され、4細分中、Ba・Bb種ヨコハケが対応する。タガ間隔は第Ⅱ期よりまとまる傾向にあるが、第Ⅳ期に比べると広い。

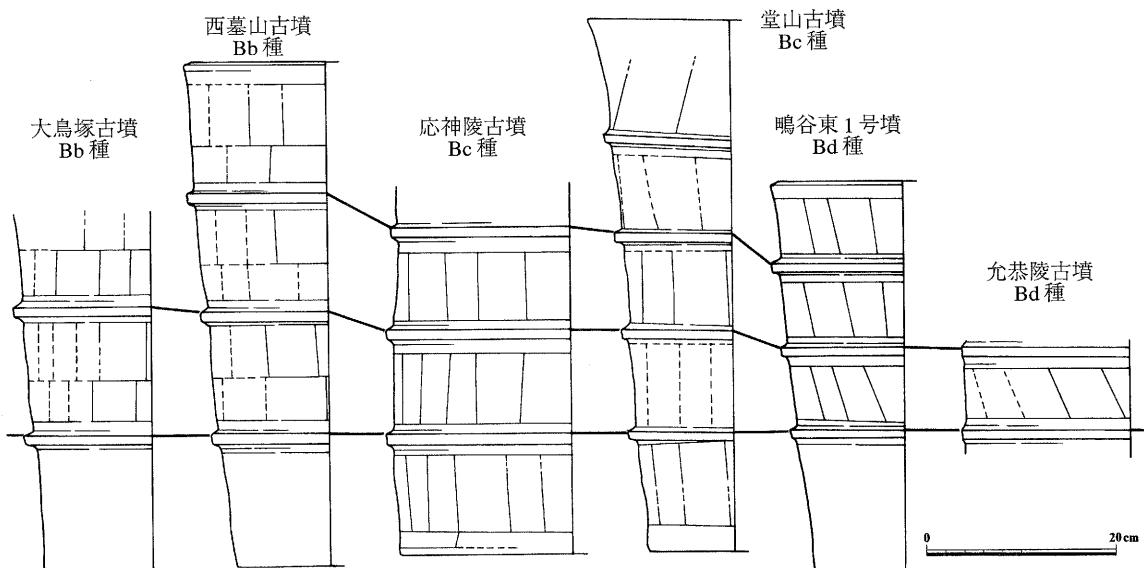


図 101 B種ヨコハケとタガ間隔からみた体部比較図

それは、タガ間を5～6cm幅程度の原体で二周して埋めることのできるタガ間隔に一致する。

第IV期前半 タガ間隔は11cm以下になる。Bc種ヨコハケを中心とする時期である。Bc種を施す場合は、タガ間を一周のハケ動作で埋めることのできる幅広い原体工具と、それに見合ったタガ間隔に統一することが必要条件となる。^{註7}この場合のヨコハケ原体は第III期とは違い、ヨコハケ専用工具ともいるべき幅広いものであると考える。応神陵古墳出土例では7～9cmの原体幅が認められ、その多くは8cm前後に集中している。ただし、原体幅は9cm以上は限界と思われ、現時^{註8}点でそれを上回るものは確認されていない。タガ間隔はこの原体幅に規制されることになり、そのため多くが11cm以下になる。つまり、第III期では12～13cmのタガ間を充足できるのに対して、第IV期ではむしろ、それ以下のタガ間隔に収めることが必要となる。

第IV期後半 タガ間隔は10cm以下になり、第IV期前半のものより幅狭くなる。工具を傾けることによって施文するBd種を中心とする。これは、依然幅広いハケ工具を使用するもののタガ間隔が狭くなるため、Bc種のようにタガに対して垂直に工具を当てることができないことによる。つまり、Bd種の出現はタガ間隔を狭くすることに起因する。これはタガ間隔が一定の幅に統一されない場合でも、また体部が外傾する場合においても、一周のハケ動作で埋めることができる点において効率的と言えるが、同時にその関係は簡略化傾向をも示している。^{註9}

第V期 タガ間隔は10cm以下になる。一次調整のタテハケを中心とする。この時期は全体の縮小化とともにタガ間隔も幅狭くなり、体部が外傾する傾向にあるため、整然としたヨコハケは施しにくくなる。

タガ間隔と外面調整

タガ間隔の規格化に伴う変化は、第III期に始まり第IV期に盛行する外面調整の一つであるB種ヨコハケと連動する。すなわち、第III期に始まるB種ヨコハケの採用に際しては、外面調整の施文に対応してタガ間を揃えるという意識を読み取れる。また第IV期はこれを発展させ、タガ間隔とヨコハケ工具の統一に重点を置く。外面調整を主として具体的にみると、第III期では幅狭い工具を二周施して埋める(Ba・Bb種)ことのできるタガ間隔を、第IV期では幅広い工具を一周

して埋める（Bc種）ことのできるタガ間隔へ指向するという違いがある。そのためタガ間隔は12cmを境にそれ以上のものは第Ⅲ期に、以下のものは第Ⅳ期とに区別できそうである。このことは、たとえB種ヨコハケの認められない個体であっても、タガ間隔を知りえることによって第Ⅲ期と第Ⅳ期を区分する一つの要素となる可能性を示している。

ここで試みに、B種ヨコハケとタガ間隔の関係を、他の古墳出土埴輪と比較することで、西墓山古墳の相対的な位置関係を検討したい。

まず西墓山古墳と時期的に近く、様相の判明している大阪府堂山1号墳出土埴輪とを比較する。両古墳出土埴輪は器高の点では大きくは変わらない。しかし西墓山古墳は三条タガ、堂山1号墳は四条タガであるため、タガ間隔という点で大きく異なり、後者の方が幅狭い。西墓山古墳のタガ間隔の平均は12.2cm、堂山1号墳では10.4cmを測り、後者については個体差を超えてタガ間隔の統一に重点が置かれていたことが指摘される〔小浜1994b〕。堂山1号墳の外面調整はヨコハケを一周巡らすBc種である。このヨコハケには8cmと9cm幅の原体を使用していたことが推測される。対して、西墓山古墳の原体幅は5~6cmと堂山古墳よりも幅狭く、この幅の原体を上下に二周施すことによってタガ間を埋めるBb種である。堂山1号墳と同様に一部に8cm幅の原体も認められるが、西墓山古墳ではタガ間隔がそれよりも広いため、この原体幅でもタガ間を一周で埋めることはできない。つまり、堂山1号墳では西墓山古墳よりもタガ間隔が狭く、反対に原体幅を広いものに統一することで、タガ間を一周のヨコハケで埋めることができると可能である。この点において、堂山1号墳は西墓山古墳よりも新しい傾向を導き出すことができ、なおかつ応神陵古墳完成時にみる特徴を備えていると言えよう。

次に、西墓山古墳と同じく三条タガをもつ京都府鳴谷東1号墳出土埴輪とを検討しよう。平均器高は西墓山古墳の5分の4程度の42.4cmを測る。そのため、タガ数は三条と同じでもタガ間隔は9.6cmとかなり狭い。その幅狭いタガ間を一周のヨコハケで埋めている。ただし、ここではタガ間を充分に埋めることのできる幅広のハケ工具を使用し、なおかつ、それをタガ間にに対して垂直ではなく傾けて埋めるBd種がある。それは、たとえタガ間隔が工具幅に見合うものに統一されない場合にも、工具を傾けることによって一周のハケ動作で埋めることができるという点で、前述の堂山1号墳より効率的といえる。また、全体の形態が上方にひらくことも、工具を傾ける要因となっている。したがって鳴谷東1号墳は西墓山古墳よりは新しく、また前述の堂山1号墳よりも新しく位置づけられる。

上記の古墳をB種ヨコハケの細分とともにその相対的な年代を推量すると、Bb種の西墓山古墳が最も古く第Ⅲ期に、次いでBc種の堂山1号墳は第Ⅳ期前半に、もっとも新しいBd種の鳴谷東1号墳は第Ⅳ期後半となる。また古市古墳群内では西墓山古墳は応神陵古墳に先行し、第Ⅲ期でも最も新しく位置づけることができる。

焼成

第Ⅲ期と第Ⅳ期を画する要素の一つに焼成方法の違いがある。川西は黒斑を有するものを野焼き焼成、無黒斑は窯窯焼成であるとし、その開始を第Ⅳ期とした。しかし、各古墳出土埴輪の実態は有黒斑と無黒斑が共存する場合や、その区別に困難を要するものもある。ここでは黒斑の有

無を時期を追ってさらに細かく観察したい。

第Ⅱ期の津堂城山古墳出土埴輪は特徴的で、野焼き焼成の状況がよく観察できる。黒斑の占める範囲が広く、そのため破片となつても黒斑の出現率はかなり高い。極く小片で残存部分に黒斑の認められないものであつても、断面部分の色調は黒色を呈している場合が多い。

第Ⅲ期の仲津姫陵古墳出土埴輪では、黒斑が付着する範囲は小さくなり、小片であるならば黒斑の認められないものがある。しかも、断面部分が黒色を呈するものは少量で、その範囲も限られる。多くは褐色系を呈している。第Ⅲ期でも墓山古墳出土埴輪は、明らかに黒斑の認められる範囲そのものが縮小している。そのため小片になると黒斑の出現率は20%と低率である。断面部分の色調は黒色を呈するものはみられず、褐灰色系である。またかなり硬質なものもある。西墓山古墳では墓山古墳と近い状況であるが、ここでの黒斑の出現率は9%とかなり低い。

第Ⅳ期の淨元寺山古墳での黒斑の出現率は3%、応神陵・野中古墳にいたつては出土量が多いにもかかわらず全くみられず、硬質を呈するものが圧倒的である。

黒斑の有無はその生産体制に左右されるため、これをもつて個々の埴輪群の新旧を決める手段としては必ずしも的確ではない。ただし、古市古墳群内においては上記したような、野焼き焼成から窯窯焼成に移行する過程を追うことができる。つまり、各古墳出土埴輪は、時期を追つて黒斑を含む割合が漸移的に減少していることが確認できることから、無黒斑に向かう窯窯への発展性をみることができる。それは、まさしく第Ⅲ期から第Ⅳ期への過渡的様相を示していると言えるであろう。この点においても、西墓山古墳出土埴輪は第Ⅳ期に移行する直前の埴輪群に位置づけることができる。

3 古市古墳群における円筒埴輪の諸段階

以上の検討の結果から、円筒埴輪の変遷となりうる各要素を時期ごとに示す。表示は、川西の第Ⅱ期から第Ⅴ期を細分するかたちで、代表的な古墳を呈示するとともに、時期的な様相をまとめた。

第Ⅱ期 津堂城山古墳／法量の大きなものが認められる時期である。口縁部の形態は直立気味に立ち上がり、端部付近で大きく外彎する特徴的なA類が多い。底部形態は断面がゆるやかな「く」の字形になるa類が多く、口縁部の形態とともにかろうじて特殊器台形埴輪の影響を残すものである。形態に個体差が顕著な時期でもある。体部は直立形態を呈し、法量の大きさに比例するように、タガ間隔は12~14cmと幅広い。外面調整はナデ、タテハケ、A種ヨコハケを主体とする。黒斑の占める範囲が広く、そのため小片であつてもその出現率はかなり高い。

第Ⅲ期古相 仲津姫陵古墳／口縁部が大きく外彎するA類は減少し、B類の端部近くでゆるやかに「く」の字に曲がる形態が認められるようになる。そのため、全体に法量の縮小化が始まる時期である。それと同時に法量にばらつきがみられる。底部形態は依然a類も認められるが、b類とともにc類が目立つようになる。全体形態は直立を呈する。外面調整には断続ヨコハケとともに、ナデ、Ba・Bb種ヨコハケがある。このB種ヨコハケの採用とともに、タガ間隔は第Ⅱ期よりまとまる傾向にある。黒斑の占める範囲はかなり小さくなるため、小片になるとその出現率は第Ⅱ期より低くなる。

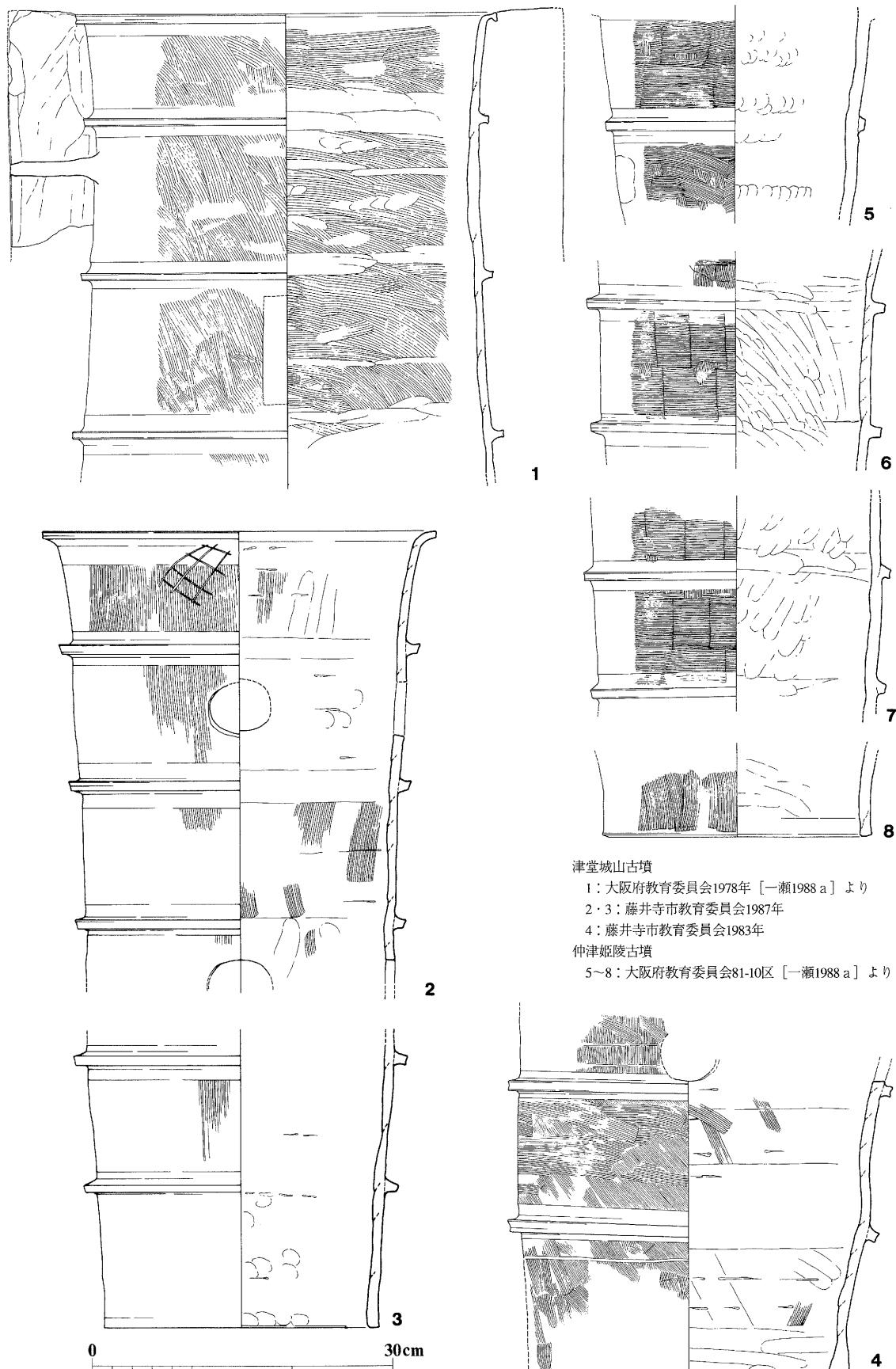


図 102 古市古墳群第Ⅱ・Ⅲ期の古墳出土埴輪実測図

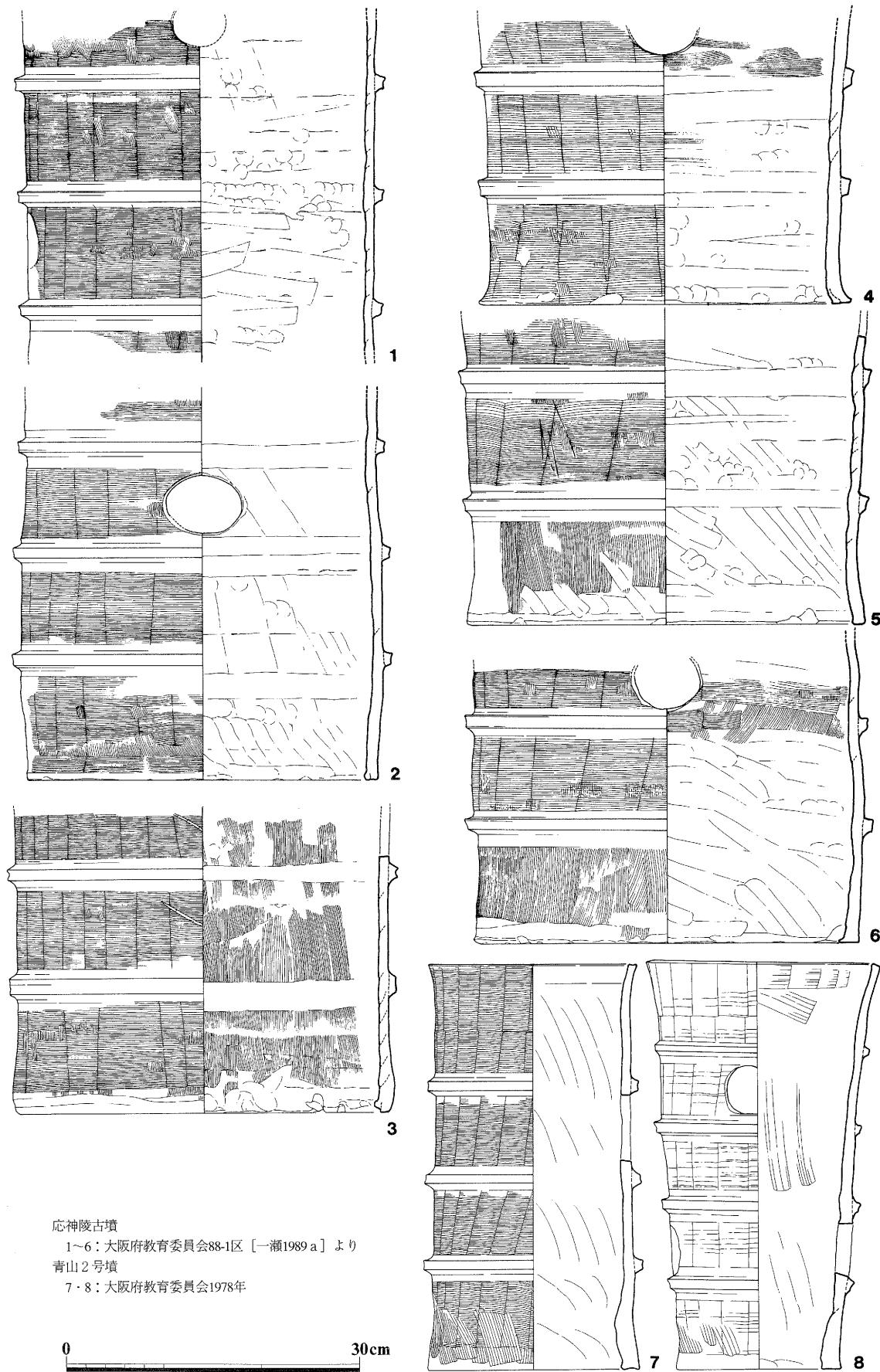


図103 古市古墳群第IV期の古墳出土埴輪実測図

第Ⅲ期新相 墓山古墳・西墓山古墳／口縁部はB類の「く」の字に曲がる形態とともに、C・D類といった直立形態が多く認められるようになる。このため、法量は古相と同じく縮小化に向かう。底部形態はc類のように、外傾しながらも第1タガから上部は垂直に立ち上がるるものも認められ、全体的には直立形態を呈する。外面調整のB種ヨコハケはBa・Bb種ヨコハケを主体とし、それとともにタガ間隔も12~13cmの範囲に収まるようになる。黒斑の占める範囲はますます小さくなり、その出現率はかなり低い。また、硬質に仕上がるものも認められ、無黒斑と言われる埴輪群と明確に分離することに困難を要するものもある。

第Ⅳ期古相 応神陵古墳／第Ⅲ期新相で縮小化傾向にあった法量が、この期を中心に一気に大きくなる時期である。また、これに反し、やや遅れて小型の円筒埴輪が出現する時期でもある。大型を呈する埴輪の口縁部はF類の突帯を貼り付ける受け口状のもので、底部はf類の垂直に立ち上がるものが多く、全体に直立形態を呈する。小型を呈する埴輪の口縁部にはC・D類が認められる。底部はd・e類を主体とし底部径を縮小させて、全体に外傾して直線的に開く形態である。外面調整のB種ヨコハケはBc種を中心とし、同時にタガ間隔も11cm以下になる。黒斑のあるものはほとんど稀となる。

第Ⅳ期中相 允恭陵古墳／古相で一気に大型化した埴輪が早くも法量を縮小させる時期である。小型を呈する埴輪も同様に縮小化に向かう。口縁部はC・D類といった直立するものや、E類の外反するものがある。底部は径20cm以下のものが多くなり、それとともに全体形態は底部から口縁部にかけて外傾して直線的に開くようになる。法量の縮小に伴い、タガ間隔も10cm前後になり、外面調整のB種ヨコハケはBd種を中心とする。ほぼ無黒斑で統一される。

第Ⅳ期新相 仲哀陵古墳／中相同様に、法量が縮小する時期である。口縁部はE類の直線的に外反するものが多くなる。外面の二次調整を施すものは少なくなり、一次調整タテハケが多い。B種ヨコハケを施すものであっても、タガ間を二、三周するものがあり、ここに至ってB種ヨコハケの崩壊が認められる。無黒斑である。

第V期 峯ヶ塚古墳／全体の縮小化とともに、底部径15cm以下のものが多くなる時期である。外面二次調整を施すものは一部の大型のものにみられるにすぎず、一次調整タテハケが圧倒的に多くなる。口縁部はD類の直立するものと、E類の外反するものに限られるようになり、ラッパ状に開くものも認められる。タガ間隔は10cm以下になり、第Ⅱ期に比べれば3分の2程に縮小していることが分かる。無黒斑である。

4 古市古墳群における埴輪生産体制

古市古墳群における円筒埴輪の変遷を以上に示した。さらにこの変遷をもとに各時期の埴輪群を概観することによって、それらを生み出した製作集団の動きを追ってみたい。また、そこに画期を見いだし、背景にある生産体制についても言及したい。

様相

古市古墳群における古墳築造の端緒は、第Ⅱ期の津堂城山古墳が規模の点において傑出するが、同時期か、もしくはやや遅ると考えられる小規模古墳も造営される。内容の判明するものと

しては、岡古墳〔天野・小西・高山1989〕、北岡古墳〔松岡他1980〕、五手治古墳があり、他では割塚・大半山・野々上古墳〔新開1993a〕などがある。これら小規模古墳は周囲に同時期の大型古墳が存在しないことや、^{註10}津堂城山古墳出土埴輪とに強い類似性をみることができない点から、散発的に造営された個別的で在地的な様相をもつと考えられる。一方、津堂城山古墳出土埴輪についても鰐付円筒埴輪がみられるなどバラエティーに富み、個体差があることから、異なった複数の製作集団が関与した可能性を示す。その複数集団の多くは上記した理由から古市古墳群以外に求めざるをえないが、^{註11}その集団間においても緻密な統合を意図するまでには至らない。

第Ⅲ期古相では、大型前方後円墳の仲津姫陵古墳が築造され、明確な一個の埴輪群としてのまとまりをみせる。これに比べ中型前方後円墳には古室山・野中宮山古墳、小型墳には向墓山・鍋塚古墳などの方墳が加わるが、出土埴輪に多少のばらつきがみられる。むしろ小型古墳である高塚山古墳出土埴輪は、仲津姫陵古墳出土埴輪と類似し、近接した位置関係からも密接な関係を窺うことができる。

この時期での円筒埴輪の口縁部形態は、仲津姫陵古墳を中心にみると、前様相的な大きく外彎する形態を残すものの、一方では直立気味のものを採用することで、個体差をなくすとともに、全体法量の縮小化を招いている。外面調整ではB種ヨコハケを採用し、技法の点においても統一化に向かう。津堂城山古墳築造に関連した複数集団を核として、徐々に統合される時期と言えるが、一方で法量のばらつきがなお認められるなど、埴輪製作集団間に内在する規範の貫徹度の弱さを露呈する。

第Ⅲ期新相では、仲津姫陵古墳よりは墳丘規模が縮小するものの、前方後円墳大鳥塚・墓山古墳が築造される。方墳としては西墓山古墳がある。この時期の円筒埴輪は直立気味の口縁部形態を採用するため、全体法量はさらに縮小する。ただし、法量の均一化が計られ、それによって外面調整のB種ヨコハケはシステムティックな方向にむく。焼成では窯窓を指向するが、墓山、西墓山の両古墳でもみられるように黒斑を徹底的に排除できない点では試行段階であり、生産体制の決定的な差となって第Ⅳ期と区分される。全体傾向としては、第Ⅲ期古相でみられるような第Ⅱ期の諸要素は払拭されるものの、一方では大鳥塚古墳に認められるやや古い要素をもつものもあり^{註12}〔上田睦1992〕、統一的な生産体制に向かうには未だ途上の様相とも言える。

第Ⅳ期古相では、大型前方後円墳の中でも突出する規模を誇る応神陵古墳が築造される。応神陵古墳では窯窓焼成された底部径40cm前後を測る大型円筒埴輪の多量配列が認められ、大型を呈するにもかかわらず法量の統一がなされる。これはB種ヨコハケの完成を促し、Bc種ヨコハケを成立させる要因ともなる。この法量と技法の関係は表裏一体である。応神陵古墳と同様の埴輪は方墳である栗塚古墳〔吉澤・清水・植村1989〕にも認められ、これよりやや縮小させるものの類似するものが同規模の方墳であるアリ山古墳、中型の前方後円墳のはざみ山古墳、造出しをもつ円墳の青山1号墳などでも出土する。この時期には窯窓焼成と外面調整のB種ヨコハケがセットとなって、墳形や規模に關係なく貫徹される状況に、第Ⅲ期に比べ際立ったまとまりをみることができる。

また、大型の円筒埴輪が出現する一方、第Ⅲ期で縮小化傾向にあった円筒埴輪が、窯窓の採用

に伴って、さらに縮小する時期もある。窯窓の使用によって、円筒埴輪の大きさが窓のサイズに規制を受けたであろうことは容易に想像がつくが、形象埴輪においても全般の縮小化が計られる。同時に写実性の喪失や装飾性の付加を伴う形象埴輪 [高橋克 1988] からは、新たなる統合化を窺うことができる（本書第6章第4節）。形象埴輪をも含めた埴輪生産が、ここにきてようやく埴輪という記号化に向けて独自の形態を意識した時期と言えよう。この円筒埴輪における小型化は、同時に大型を呈する埴輪との差を顕著に表すこととなる。しかも、小型の埴輪は第IV期中相において盛行し、以降の円筒埴輪大量生産の方向性を示すものとして大きく影響を及ぼすこととなる。ここで初めて円筒埴輪の規格は明確に大型と小型の二極化を迎える。

以上にみたように、第IV期古相では埴輪の大型と小型といった規格化とともに法量の統一、Bc種ヨコハケの完成、窯窓焼成といった諸要素が全般に採用されることから、工人の特定化が促され、それに伴う供給体制が編成されたことを窺うことができる。

第IV期中相では、大型前方後円墳の允恭陵古墳が築造される。方墳には野中古墳がある。一方で、方墳や円墳を主体とする小規模墳が林・土師の里・青山などで群をなして築造される。円筒埴輪は第IV期古相で一気に大型化するものの極めて短期間で、この時期では早くもその縮小化が始まる。小型の円筒埴輪もさらに縮小し、同時に、B種ヨコハケの簡略化、省略を伴いながら古市古墳群のみならず、長原・上人ヶ平古墳群など広範囲な展開をみせる。このさらなる小型化の方向性は、小規模古墳の爆発的な増加に伴って需要が増し、それぞれの小型墳群単位での小規模経営が成立したことによる。

第IV期新相での大型前方後円墳には白鳥陵・仲哀陵古墳がある。他には軽里古墳群などでみられる小型の前方後円墳と円墳、方墳が認められるにすぎない。直径約23mを測る円墳の若子塚古墳 [吉澤 1994a]、墳丘長約23mを測る造出しをもつ円墳の林2号墳 [上村 1980、川村 1993] では円筒埴輪の小型化の方向性はより一層明確となり、外面の二次調整は小型の埴輪に限らず省略されることが多い。ここに至って古市古墳群での埴輪生産はシステムティックな管理下から離れ、急速にその力の縮小傾向を読み取れる。

第V期では大型の前方後円墳はみられない。峯ヶ塚・仁賢陵・安閑陵・清寧陵古墳など規模を縮小させる前方後円墳の他に、矢倉古墳などの小規模墳が認められる。円筒埴輪の縮小化はより一層拍車がかかる。これらの一連の流れは、応神陵・仁徳陵古墳段階に成立した生産工程が次々と省略、簡略化していく過程を如実に表す時期である。そして、新しい時期では大阪府日置莊埴輪窯例 [十河 1991] のように、大型を呈し鱗をもつものが確認されるが、システムティックな工程はほぼ姿を消し、古市古墳群ではこの期の実態は定かでない。^{註13}

以上、生産体制の視点から各時期の様相を概観した。古市古墳群では、津堂城山古墳築造に関する異なった複数の埴輪製作集団を核として、法量や技法上の規格が徐々に統合される過程を見いだすことができる。そして第IV期の応神陵古墳築造に向かって集約され、特定集団化する状況が窺える。窯窓の採用と法量の統一に伴うB種ヨコハケの完成をもって、埴輪生産のピークとも言えるこの体制は、同時にそれ以降の時期に盛行する省略化や退化の要素をも内包しながら、以降の円筒埴輪生産の方向性を示すものとしても大きく影響を及ぼす。この影響は、第IV期に増加

する古墳造営に伴って展開するが、一定方向の統合には向かわず、それぞれの規模で集団経営され、縮小し、第V期に至っては痕跡的に見いだされるのみとなる。

画期

さて、5世紀代における埴輪生産体制については、円筒埴輪の規格が古墳の規模や墳形の差に関係するとの解釈【天野・松村 1992、笠井・吉田 1992】を受けて、大型古墳と中・小型古墳の埴輪製作集団に違いがあったことを論じる意見が提出された【高橋克 1994】。それは5世紀における畿内での埴輪生産は4世紀の生産体制の上に位置づけられるものであり、窯窯導入を機に工人組織の統合整備が進んだ段階と捉えることができるというものの、一元的に供給する体制に移行するのは6世紀に入ってからとする。

しかし、上記したように古市古墳群における製作集団の動向からは、必ずしもそういった状況をみることはできない。ここでは、埴輪生産の最大の画期について、5世紀代の生産体制の様相に検討を加え述べていきたい。

円筒埴輪の規格の問題については、すでに検討したように必ずしも古墳の墳形や規模に連動するような状況を見いだすことはできない。囲繞配列する円筒埴輪で最も大きなものは奈良県メスリ山古墳において認められるが、古市古墳群では第II期の津堂城山古墳に求められる。以降での全般的な傾向は時期を追って全体法量を縮小する方向にある。しかしこれは古墳の規模や墳形に関係なく認められる。円筒埴輪の規格は、むしろ時期的な推移をみせるのである。しかも、その推移は、第IV期の応神陵古墳段階を境として大きく変化し、区分される。円筒埴輪の規格は応神陵古墳築造を契機として、むしろ一気に大型化の方向に向けられた。しかしその一方で、これにやや遅れ小型の円筒埴輪が出現する。これは第III期で縮小化にあった円筒埴輪をさらに縮小させるもので、この結果大型と小型という明瞭な差を生み出した。また以降では、応神陵古墳に典型的な大型の円筒埴輪は法量を縮小させ、中間的な大きさの埴輪を生み出すこととなる。ここにおいて円筒埴輪は大型、中型、小型といった規格をようやく見いだすことができる。ただし、こういった円筒埴輪における規格の違いは、その樹立に際して墳形や規模に反映されるといった状況を必ずしも見いだすことはできない。

例えば、大型の円筒埴輪が小規模古墳に樹立される状況は、古市古墳群のみならず大阪市長原古墳群内においてもみることができる。須恵器と共に、時期的に様相の判明する古墳を取り上げると、31号墳【大阪市文化財協会 1982】は、一辺 8.5 m の方墳であるが、体部径 45 cm 以上を測る円筒埴輪が出土する。同じく小型方墳である長原 29 号墳からも体部径 38 ~ 47 cm を測る大型の円筒埴輪が出土するといった状況を示す。

円筒埴輪の法量における推移は第IV期で一旦、大型と小型という再整理の段階を経ながらも、第II期から第V期まで連続して時期的な推移を辿ることができる。中でも小型の円筒埴輪は第IV期に開始される窯窯の採用と、埴輪の需要が格段に増加することから量産化され、以降の円筒埴輪の流れを決定づける結果となり、第V期まで連続する。

法量の推移に加え、B種ヨコハケの変遷も連続して追うことができる。B種ヨコハケの萌芽はすでに第II期の津堂城山古墳においてみられ、本格的な採用は第III期となる。B種の完成とも言

うべきBc種は第Ⅳ期の応神陵古墳段階で成立する。しかしながら、このシステムティックな技法は一方で、簡略化と省略化を内包するものでもあった。その好例は墳丘長約33mを測る造出しをもつ円墳の青山2号墳である（図103-7・8）。円筒埴輪の平均サイズは口縁部径24cm、底部径16cm、器高44cmを測る。外面にはBc種ヨコハケが確認されるものの、その出現率は2割程度である。このように小型化された円筒埴輪は早くも外面調整のB種ヨコハケの省略を伴い、須恵器窯の使用とも相まって盛行する。その後、B種の退化は大・中型の円筒埴輪にも及び第V期に至るのである。

こうした埴輪生産で最も大きな変革は、やはり第Ⅲ期と第Ⅳ期を画する窯窓の採用である。古市古墳群では第Ⅳ期の応神陵古墳段階に完成するが、この試行段階はすでに第Ⅲ期新相でみることができる。古市古墳群では野焼き焼成から、窯窓焼成の試行段階を経て、完全に無黒斑で統一するといった段階的なプロセスをみることができるのである。しかしながら、こういったプロセスを現状では古市古墳群以外の地域で見いだすことは難しい。すでに検討に挙げた第Ⅳ期に属する堂山1号墳、鳴谷東1号墳出土埴輪には少なからず黒斑が認められる。両古墳出土埴輪は、その黒斑の占める割合から、おそらく野焼き焼成であったと考えられる。埴輪生産については、各々の地域における生産体制に左右され、堂山1号墳、鳴谷東1号墳のように埴輪生産の中心から離れた地域においては窯窓導入以後も、依然として野焼き焼成の段階があったと考えられる。^{註15}しかし、こういった状況も仁徳陵古墳、ニサンザイ古墳までの極めて短期間に、ほとんどの地域で窯窓焼成へと移行し、汎日本列島的に浸透する。

以上にみたように、古市古墳群における埴輪生産は法量、調整、および焼成において、その変遷を追うことが可能である。応神陵古墳出土埴輪に認められる法量の統一に伴うB種ヨコハケの完成や、完全な窯窓焼成の達成は、前段階から続く技法上の一つの到達点を示し、よりシステムティックな管理体制へと移行したことが窺える。同時に以降の埴輪生産に影響を与える点においても第Ⅳ期の応神陵古墳段階に画期を見いだすことができる。埴輪生産における各要素は、墳丘規模や墳形に関係なく時期的な変遷を認めうる状況から、大型墳と中・小型古墳における基本となる埴輪製作集団の差異を明確に見いだすことは難しい。むしろ大型墳築造を契機とし、その集団とそれを取り巻く集団との間が統合される過程を重視すべきであろう。中でも、応神陵古墳築造は従来体制の一掃、再編が計られた段階と捉えることができ、全体の生産管理体制が束ねられるという点において、ここに5世紀代の大きな転換の画期を見いだすことができる。同時に、各古墳がより重層的な構成をもって展開することに留意すべきであろう。

5 墓山古墳をめぐる方墳の在り方と応神陵古墳画期

最後に、今まで述べてきた古市古墳群における埴輪生産体制の視点から、墓山古墳を中心として位置する中・小型古墳の在り方を考えまとめとしたい。

前方後円墳である墓山古墳の周囲には、西墓山古墳を含め4基の方墳が認められる。西墓山古墳は一辺約31m、向墓山・淨元寺山古墳はともに約68m、野中古墳は37mを測り、墳丘規模という点で差異が認められる。墓山古墳を主墳として、これら4基の方墳が陪冢の関係と捉えら

れるのは、上記したような位置関係と墳丘規模及び墳形における墓山古墳との明らかな差異が認められる点にある。陪冢としての性格を有する条件としては、これに加え、主墳との企画的な配置に基づき、同時期とみなしえる程度の期間内に築造されること、また両被葬者の生前の社会的関係を推測できる遺物が存在することであるとする〔北野1976〕。ここでは円筒埴輪から導き出した築造時期にかかる成果をもとに、これらの古墳が同時期とみなしえる範囲にあるのか、そして、それが陪冢的な性格を有するものであるのかを再検討したい。

埴輪の観察からは、まず先行して向墓山古墳があり、次に墓山古墳、西墓山古墳、淨元寺山古墳、野中古墳といった変遷が考えられる。前三古墳は第Ⅲ期に、後二古墳は第Ⅳ期に属することはすでに指摘した。墓山古墳の周囲に位置するこれらの方墳は第Ⅲ期から第Ⅳ期にわたっており、この間に応神陵古墳築造の画期をむかえることとなる。

すでに検討したように、古市古墳群の円筒埴輪は形象も含め、応神陵古墳築造を契機に再整理され、窯窓の採用とともに以降の埴輪生産に影響を与える点において、第Ⅳ期に大きな画期を認めることができる。また、墳丘規模という点では応神陵古墳が突出し、古市古墳群においては以降もこれを上回るものは築造されない。同時に、前方後円墳は減少し、これと軌を一にして中・小型の円墳、方墳の築造が増加することから、この時期に古墳の規模や墳形に対して規制が働いた可能性を考えることができる。つまり、第Ⅲ期の向墓山・西墓山古墳と、第Ⅳ期の淨元寺山・野中古墳の方墳の在り方を同一に捉えることは慎重にならなければならないのである。天野も小型古墳が出現する契機については一様ではない〔天野1996b〕と指摘する。

淨元寺山、野中の両古墳はその規制後に築造されたことを考慮に入れる必要があり、第Ⅲ期に築造された向墓山、西墓山の両古墳の在り方と同列に扱うには問題が残ることを示す。さらに、向墓山古墳は、墓山古墳に先行する可能性もあり、陪冢という性格付けには、第Ⅱ期の岡古墳と第Ⅳ期の仲哀陵古墳の関係のように、単にその位置関係では律しえない問題を含んでいる。対して西墓山古墳は、墓山古墳に時期を隔てず築造されたことが考えられ、その埋納された内容からも墓山古墳とのより密接な関連性を窺うことができる。

こうした墓山古墳周辺の4基の古墳の在り方は、第Ⅲ～Ⅳ期の中での時期幅をもって存在し、その間に応神陵古墳築造を契機とした規制を受けるという変化が存在することを考える必要がある。淨元寺山、野中の両古墳は応神陵古墳段階を画期として、在地勢力を統合し、新たな支配下のもとに造営された姿とみることもできるであろう。野中古墳の副葬品にみる墓山古墳との共通性は、相互の関連性を窺うことができるものの〔北野1976〕、その関係は単に主墳と陪冢といった従属性のみに帰される性格のものではなく、前述したような社会的要因を背景として成立したと考えられるのである。対して、西墓山古墳は墓山古墳を主墳とする陪冢の性格を有しており、人体埋葬を伴うのか否かの問題を残すとしても、その成立は野中古墳とは異なるものと考える。

墓山古墳周辺の4古墳の時期を詳細にみた結果、いずれも方墳という形をとりながらも、その質的な内容や時期において異なることが分かった。大型前方後円墳である墓山古墳をとり囲み、あたかも陪冢的な形成をみせるこれらの方墳は、応神陵古墳築造に伴う古墳時代中期の大きな変革の中で、重層的な在り方を複雑に示し累積された結果と考えることが充分に可能なのである。

- 註1 1980年、大阪府教育委員会によって後円部北西側で三箇所のトレンチ調査が実施された。最も北に位置する第1トレンチから、この大型円筒埴輪とともに、さしば形埴輪が内濠外法面に転落した状況で出土した。限られた面積での出土状況から、この大型円筒埴輪はさしば形埴輪の台部を構成するものであった蓋然性は高く、もともと内堤に樹立されていたと考えられる。
- 註2 天野は、この大型の津堂城山古墳出土例が内堤の一角から出土することから、特定の区画に少量樹立されたと推定し、これに対し墳丘や堤を囲繞した円筒埴輪列は、大半が中型円筒であると指摘する。そして、円筒埴輪の大きさは「それぞれ異なる使用目的に応じて作出されている」とする〔天野・松村1992〕。このことは一古墳の中で、規格や使用目的の異なる円筒埴輪が併用されていたことを物語っている。ところが、特定の区画に少量樹立する大型円筒は、第Ⅳ期前半には法量の縮小とともに多量配列されるようになり、それ以降は法量のさらなる縮小とともに数量を減少させるとした。天野の言う大型円筒の根拠ともなった津堂城山古墳例は、その出土位置から限定的に用いられたと考えられるが、それが第Ⅳ期になって多量に配列されるのであれば、先に挙げた「異なる使用目的に応じて作出される」との意見に矛盾が生ずる。後述するように、限定的に用いる少量の大型埴輪と、それより法量を縮小して多量に配列する円筒埴輪は、一古墳の中で併用され、しかも両者は併行して第Ⅴ期まで認められるのであって、その変遷は各々を分けて捉えるべきである。
- 註3 一辺23mの萱振1号墳からは底部径30cmの小型のものと、40cm近い大型のものが9対1の割合で出土するという。墳丘裾に樹立されたものには大型品に該当するものではなく、大型の多くは墳頂部の要所に樹立されていたとし、その中には形象埴輪の台部を含む可能性が指摘される〔高橋克1992a〕。津堂城山古墳の大型を呈する円筒埴輪に形象埴輪が載る蓋然性が高いことから考え合わせると、こういった少量で大型の円筒埴輪は、形象埴輪の台部を構成するものであった可能性もある。
- 註4 応神陵古墳の陪冢と考えられる栗塚古墳は一辺43mの方墳であるが、応神陵古墳出土埴輪と同規格の円筒埴輪が出土する。
- 註5 西墓山古墳出土埴輪には体部の二次調整にBb種ヨコハケを施す個体であっても、底部では一次調整のタテハケを残すものや、B種ヨコハケを施しても一周するだけの個体も多く存在する。このため、底部の調整のみをもって、西墓山古墳出土埴輪の二次調整にBc種ヨコハケが存在するという誤解を生んでいる。一方では青山2号墳出土例（図103-7・8）にみると、体部にBc種ヨコハケを施すものであっても、幅広い口縁部ではB種ヨコハケを二周したり、また幅狭い口縁部の場合は一次調整のタテハケのみでB種ヨコハケを施さない個体が認められる。したがって、体部ではタガ間を統一するという意識が、口縁部や底部には徹底されないことが挙げられる。こういった理由から、タガ間隔とB種ヨコハケの関係を考える場合においては、口縁及び底部高とは一律に扱わないほうがよいと考える。加えて、B種ヨコハケはタガ間の充足行為のみに、その変遷が追え、規格化されたタガ間隔より明らかに法量の異なる場合の口縁部や底部のみの観察は、特に慎重を要する。
- 註6 タガの貼り付けに際しては、器壁に方形刺突や凹線、半截竹管状の押圧、ヘラ先による押圧、ユビなどによる沈線によって、あらかじめその位置を設定する方法がある。この作業はタガの製作に例外なく行なわれると指摘される〔赤塚1979〕。このためタガを均等に割り付けるという意図は当初から存在していたと考えられるが、第Ⅱ期ではタガ間隔と外面調整は必ずしも連動しないことが、第Ⅲ・Ⅳ期との顕著な差となる。
- 註7 応神陵古墳出土の埴輪群はBa・Bb・Bc種ヨコハケを含むことから、その造営期間中にこれらの必要条件を達成していることが分かる。応神陵古墳の造営期間は長期に見積もることができるところから、より細かい要素に着目すれば、Bc種ヨコハケの完成に至る過程を追うことができる。
- 応神陵古墳出土埴輪はBa・Bb種ヨコハケを施す個体であっても、タガ間隔はBc種ヨコハケを施す個体と大差がない。ハケ原体の幅は最小で4cmも認められるが、6~7cmが多く、まれに9cm幅も認められる。つまりタガ間を前段階よりも幅狭いものに統一するものの、ハケ原体幅は従来と同様の幅狭いものや、あるいは幅広いものを用いたりするなど、未だ統一性のみられないBa・Bb種の段階がある。この段階を経て、次に8~9cmの幅広いヨコハケ原体を使用した工具でタガ間を一周で埋めるBc種を可能としている。すなわち、タガ間隔の統一がまず行なわれ、次はそれに見合った幅のヨコハケ工具を専用化するといったプロセスを見いだすことができる。こういった過程を確認できるものの、応神陵古墳出土埴輪は法量、形態、焼成方法に連続性、統一性がみられることから時期的に分離して考える必要はなく、ここに第Ⅳ期としての一個の埴輪群としての総合的な画期を見いだすことができる。

- 註8 Bc種ではBa・Bb種を施す場合とは違って、幅広いハケ工具であるため、原体に使用する板材には良好な太い材を均質に入手する必要があったと考えられる。
- 註9 第IV期後半の仲哀陵古墳出土埴輪には、B種ヨコハケを二周、もしくは三周して埋める個体が少量ながら存在する。それは、タガ間隔が10cm前後とかなり狭いにもかかわらず、ヨコハケ工具の幅が4cm前後とそれ以上に幅狭いものであるため、一周するだけでは埋めることができないことがある。この時期ではもはや、B種ヨコハケの施工方法とタガ間隔は連動していない。ここではBd種ヨコハケに移行するとともに、その退化がみられる時期と捉えることができる。この点については、すでに一瀬が「・・・本埴輪群がタテハケ主体であるという状況から、ハケ工具をタテハケ調整の連続の中でヨコハケを行なうという環境に変化したというヨコハケ2次調整の退化現象として再度、登場したものと考えたい。」[一瀬1992a]と指摘している。つまり、仲哀陵古墳にみられるBb種ヨコハケは、この期においても依然第III期の特徴が存在するのではなく、第IV期後半にみられる退化傾向と捉えるべきである。たとえ現象面としてBb種ヨコハケに分類されるものであっても、そのタガ間隔が第III期のそれと比較して幅狭いものである場合は、第IV期後半に位置づけることができるという点においてもタガ間隔の比較は有効であると考える。
- 註10 一辺33mを測る岡古墳は一辺30m程の割塚古墳とともに、仲哀陵古墳に近接して築かれている。岡古墳の調査により、これらの方墳と仲哀陵古墳との築造時期に1世紀近い隔たりがあることが判明した[天野・小西・高山1989]。
- 註11 津堂城山古墳出土埴輪と類似する埴輪としては、八尾市萱振1号墳、大阪市一ヶ塚古墳出土例などを挙げることができる。
- 註12 大鳥塚古墳出土埴輪には硬質を呈するものも確認されることから、この期に含めて考えているが、口縁部形態、全体形態において仲津姫陵古墳と同様の古い様相をもつものがあるなど統一性を欠く。
- 註13 本市調査HM95-5区において、井戸枠に転用されたこの種の埴輪が出土する。径50cm近くを測る大型の鰐付円筒埴輪である。調査区に近接して野中宮山古墳、はざみ山古墳が存在するが、時期的な相違が大きく、この種の埴輪がいずれの古墳に樹立していたかは不明である。
- 註14 1978年、大阪府教育委員会の調査による。「大阪府立近つ飛鳥博物館」にて保管されているものを実測させていただいた。
- 註15 古市古墳群でも極めて小規模な生産である場合に限って、野焼き焼成が認められる。土師の里8号墳は一辺約12mの方墳で、埋葬施設に三基の円筒棺を使用している。そのうちの二基は専用棺で、中でも第1主体部の円筒埴輪には黒斑が認められる[中西・天野・川村1994]。埴輪の特徴から仁徳陵古墳併行期と考えるが、この期においても専用棺の製作という特殊な事情のある場合においては野焼き焼成であったことが考えられる。

第4節 5世紀代の蓋形埴輪の変遷

1 はじめに

西墓山古墳の蓋形埴輪は少なくとも2個体を確認できるものの、全体形態を窺えるものではない。肋木部分の出土はないが、それを有するものはなかったと考え、西墓山古墳の典型的な蓋形埴輪として図上での推定復元案を試みたのが図104である。また、本書に掲載した野中古墳の調査から出土した蓋形埴輪は比較的良好な資料である。^{註1}ここでは、これをも含めた形態的特徴を検討するとともに、5世紀代の蓋形埴輪の中での編年的位置づけを試みたい。

蓋形埴輪の型式分類はすでに田中秀和[田中秀1988]、高橋克壽[高橋克1988・1992b]、松木武彦[松木1990・1992]らによって試みられ、その変遷過程の一端を追うことができる。さらに立ち飾りの形態は伊賀高弘[伊賀1989]、櫻井久之[櫻井1991]らの論考がある。それらの成果を受け、畿内以外での地域性研究[松木1994b]や、蓋形埴輪として初現期の資料の発見[伊